令和５年度

教職課程
自己点検・評価報告書

大阪芸術大学短期大学部

令和６年３月

目次

Ⅰ　教職課程の現状及び特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　基準領域ごとの自己点検・評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

基準領域１　教育課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み・・・・2

基準領域２　学生の確保・育成・キャリア支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

基準領域３　適切な教職課程カリキュラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Ⅲ　総合評価（全体を通じた自己評価）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

Ⅳ　「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス・・・・・・・・・・・・・・・・12

Ⅴ　現状基礎データ一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

Ⅰ 教職課程の現況及び特色

1 現況

（1） 大学名：大阪芸術大学短期大学部
保育学科
メディア・芸術学科
デザイン美術学科
（2） 所在地：大阪学舎 大阪府大阪市東住吉区矢田２－14－19
伊丹学舎 兵庫県伊丹市荒牧４－８－70
（3） 学生数及び教員数（令和５年５月１日現在）
学生数：評価対象学科 保育学科 119 名 大学全体 772 名
※メディア・芸術学科、デザイン美術学科は教職課程なし
教員数：教職課程科目（教職・教科とも）9 名 大学全体 51 名

2 特色

本学は、塚本英世により 1945 年（昭和 20 年）に創設された平野英学塾を起源とする。その後 1946 年浪速外国語学校、1949 年浪速外国語専門学校、1951 年浪速外国語短期大学、1954 年浪速短期大学となり、2000 年に大阪芸術大学短期大学部と校名変更して今日に至っている。現在、教職課程を有する保育学科においては人文科学系、社会科学系、自然科学系、語学関連の科目や日本伝統文化（茶道・華道）、など多様な科目を設置することで、豊かな人間性と深い教養を備え持つ教員の養成を目指している。また、専門科目では、幼稚園教諭２種免許状と保育士資格、社会福祉主事任用資格取得に関する科目を設置し、教育の専門家の育成はもとより、幅広く社会で活躍できる人材の育成を行っている。そのため、コミュニケーション能力、実践的指導力、プレゼンテーション能力、課題解決能力などを養うことにも力を注ぎ、保育教諭としての道を確実に切り開いてきた。

Ⅱ 基準領域ごとの教職課程自己点検・評価

１ 基準領域１ 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

（１）基準項目１－１ 教職課程教育の目的・目標の共有

〔現状〕

教職課程教育の目的・目標については、3 月に行われる入学前教育、4 月のフレッシュマン・キャンプ、並びに本学独自の「プレ・ゼミナール」の初年次教育の場において、本学の目指す教師像も併せて学生に周知している。本学の学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程編成や実施の方針（カリキュラム・ポリシー）は，以下のとおりである。

１）ディプロマ・ポリシー（DP）

豊かな人間性を育み、実践力があり、課題解決能力を身につけ、将来教育・保育に携われる人材を育成することを目標とする。以下のような能力を身につけ、かつ所定の単位を修得した学生に「短期大学士」を与える。

・幼児教育・保育に関する基本的な専門知識を身につけている
・幼児教育・保育に関する基礎的な技術を修得している
・各専門領域において培った専門知識・技術を活用し、課題を解決することができる

２）カリキュラム・ポリシー（CP）

総合教育科目では、豊かな人間性と深い教養を身につけるため、人文科学系、社会科学系、自然科学系、語学関連の科目や日本伝統文化（茶道・華道）、など多様な科目を設置する。専門科目では、幼稚園教諭２種免許状と保育士資格、社会福祉主事任用資格、こども音楽療育士取得に関する科目を設置し、専門的な知識と方法論を学ぶ。コミュニケーション能力、実践的指導力、プレゼンテーション能力、課題解決能力などを養うために、ゼミ形式の演習科目を設置する。

〔優れた取組〕

ディプロマ･ポリシーやカリキュラム･ポリシーは、新入生に対して毎年発行される『学生便覧』（資料　１－１－１）や本学ホームページへの掲載など様々な資料にも明記され、アカウンタビリティーを果たしてきた。入学生ガイダンスや「プレ・ゼミナール」においても、ディプロマ･ポリシーやカリキュラム･ポリシーの周知に努めた。

教育実習前には実習担当者との個別に対話の時間を設けたり、「プレ・ゼミナール」において教員になることへの意思確認や動機づけを行ってきた。また 2 年次の本学の独自の科目である「保育・教職基礎演習」では、教員として必要な現代社会の教育や子どもに関する問題を把握し、問題解決をする力の養成に努めた。 2 年次の「保育・教職実践演習」では「履修カルテ」を活用し、学生は教員として必要な資質能力についての自己評価を行い、教員になることへの意欲を高めてきた。本学の「履修カルテ」は、本学事務局とゼミ担当の教

員と連携して運営されており、学生と教員それぞれの成長の気づきを記述することが可能になっている（資料１－１－２）。「保育・教職実践演習」では、「履修カルテ」で自己評価を行い、振り返りをすることで学生の課題を析出し、専門的で実践的な知識や方法を修得できるように教員も個別の相談や支援を行った。

〔改善の方向性・課題〕

教職課程においては、教員と職員が協同してカリキュラムの質の向上を図ったり、「プレ・ゼミナール」や「保育・教職実践演習」等の少人数クラスの授業を中心に学生の個別支援等も行ってきた。今後は、学生の学生に対する教員養成におけるカリキュラム・ポリシー等の周知徹底を図るとともに、これまで以上に教職員の連携を深め、「保育・教職実践演習」等の計画的かつ体系的なカリキュラムの実施に今後も努めていくことが課題である。

〈根拠となる資料・データ等〉

１－１－１　学生便覧 2023

１－１－２　履修カルテ

（２）基準項目１－２　教職課程に関する組織的工夫

〔現状〕

１）研究者教員と実務家教員、事務職員との協働体制

本学では、附属幼稚園の副園長をはじめ、元幼稚園教諭としての経験豊富な実務家教員に加えて、研究者としての経験の長い教員や芸術大学としての特色から音楽や造形表現などの芸術に長けた教員、並びに教職経験のあるいは幼稚園免許を所有した事務職員を配置しており、協働体制が構築されている。特に実践力の修得に資するように、本学では隣接する附属照ヶ丘幼稚園など附属幼稚園４園との連携を図り、教育の専門家の育成に努めてきた。例えば、教員養成を目指す学生の動機づけとなるように、１年次には４月に「見学実習」を行い、入園まもない子どもたちの援助をすることで、初年次の学びを深める機会を設けている。園児と関わるスポーツ体験の科目を必修科目として設け、最新の子どもの姿を学生が学べる機会が確保されている。このほか、附属幼稚園で行われる運動会などでボランティア等として学生に参加を呼び掛け、学校行事に際しての園児との関わり・援助を経験する時間も用意している。

また、「教育実習指導」においては附属幼稚園４園の副園長、大阪市公立幼稚園の園長経験を有する実務家教員が担当しているため、教員としての使命感を意識する学生を育成してきた。「教育実習指導」では、隣接する附属照ヶ丘幼稚園に観察実習を行う機会を設け、学生に教育環境に関する理解や子どもの援助への学びを深め、教育実習に向けての動機づけを行っている。また１年次教育実習後は、１年生だけで実習報告会を行い、教育実習の振り返りから自己の課題や今後の実習の目標等を見出せるように指導している。２年次の教

育実習後は、１年生とともに実習報告会を行い、２年次の教育実習の学びや課題を１年生に伝えることで有機的に学科全体で実習を学べる機会を設けている。

さらに、学科会議においては常に学生指導の情報交換を行い、細やかで適切な指導を協働的に行っている。

２）教職課程教育を行う上での環境整備、ＩＣＴ教育環境の強化

本学では Society5.0 に対応できる教員養成の大学として、環境整備を行いつつある。まず、実践的な教員の資質を育成するために、模擬保育室や乳児保育室周辺に、実際に幼稚園や保育所で利用する幼児サイズの机や椅子、おもちゃ、等身大の人形などを完備するとともに、沐浴施設を備えている。先述した附属幼稚園が 4 園もあることで、各地域の子どもに触れながら学びを深めることができる機会を持つことができているといえよう。また、図書館や２号館ではアクティブ・ラーニングを視野に入れた環境設定をしており、移動式の机や椅子を設置し、討議を流動的な形態で組めるようになっている。さらに、個室タイプのピアノレッスンルームが多数備えられており、学生たちが自由にピアノ技術の練習をできるようになっている。そのほか、オープンキャンパス「あんよがじょうず」において、高校生に本学学生が保育実技を披露する時間を確保することで、１年生と２年生が自然に交流し、後輩が先輩の学びの姿に啓発され、自主性や積極性、協働性を伸ばす環境を教職員が形成してきた（資料　１－１－１）。

ＩＣＴ教育環境の強化については、大学の共有スペースに Wi-Fi を完備してネットワークを活用できるようにし、大半の講義室には最新式プロジェクターを設置し、ICT を活用した学びが可能となっている。今年度においては、各教室の ICT の設備を新調し、学生へのきめ細かな指導が行えるように設備も整えつつある。例えば工作室ではプロジェクターを活用し、様々な表現遊びにも取り組めるようにしている。また本学３号館には、ICT を活用するためのコンピューター室(３号館)があり、現在、その内実を充実しつつあるところである。

３）授業アンケートの活用やＦＤの取組

学生による授業アンケートを前期と後期の２回実施し、その成果はまとめて学内で公開・共有している。また、公開授業を前期と後期に実施し、本学では教員のみならず、事務職員も授業の参観に加わる工夫を行ってきたことで、教育の質を高め、教職員の協働性を向上させることを可能にしている。本学全ての専任教員が教育活動の省察や改善策を申し出るようになっており、全学的に質の保証に取り組んでいる。授業アンケート結果は、本学 HP に掲載し、常に教育課程における教育の質の向上を意識し、授業の改善を行っている。（資料１－１－２）

４）教職課程における研究業績の支援

教職課程の授業科目担当としてふさわしい研究業績を積み重ねられるよう、各授業科目担当教員には、本学独自の塚本教育研究補助費を公募し、紀要の発行を行ってきた。科研費については毎年、組織的に説明会を丁寧に行い、科研費を取得する教員や放送大学教育振興

会助成を獲得する教員もおり、4 年制大学並みの教育専門家の育成に貢献しているといえよう。また、毎年、研究業績を報告するように教員に義務付け、幼稚園教員の質の向上に向けた研究の動機付けも行っている。

〔優れた取組〕

以上のような協働体制が構築されていることや環境整備をおこなってきたこと、ならびに教員の質の向上により、現場に近い授業や専門性の高い授業を展開することが可能となっている。例えば初年度は附属幼稚園４園で教育実習を行ない、隣接する附属照ヶ丘幼稚園において授業を行う科目を設定することで、本学の教職員と附属幼稚園とが連携し、実践に強い教員の成長を細やかに支えることができている。本学教員は、教育実習園に巡回訪問をし、学生への個別の相談、指導を行い、きめ細やかな対応を行っている。

また、学生は空き時間を利用して、個室のピアノ練習室やコンピューター室を活用し、知識・技能の向上に向けて取り組めるようになっている。そのほか、オープンキャンパスで地域の高校生と本学学生と教員とが幼稚園教育の学びを共有することができ、幼稚園教員の資質として必要な自主性や積極性、協働性を伸ばす環境を教職員が形成している。

〔改善の方向性・課題〕

教職課程の運営については、本学では保育学科教員と附属幼稚園教員、ならびに職員によって、十分に協働的に進められてきた。今後は、授業アンケートをもとにさらなる教育の質の向上を図っていくことが求められる。また、今後は ICT 教育に関する環境も整え、学生に対する情報リテラシーの教育や ICT を活用した教育を行える教員の育成ができるように教職員が協同して学生の知識や技能の修得の支援を行っていきたい。

〈根拠となる資料・データ等〉

資料１－１－１　2023 オープンキャンパスチラシ「あんよがじょうず」

資料１－１－２　授業アンケート集計結果

https://osaka-geitan.jp/assets/pdf/questionnaire_r04.pdf

基準領域２ 学生の確保・育成・キャリア支援

（1）基準項目２－１ 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

〔現状〕

教職課程で学ぶにふさわしい学生の育成に努めている。入学者受け入れのため、DP には、保育学科が求める人物像を明確に示している。特に本学 HP においてデジタルパンフレットを掲載し、芸術大学としての特性を生かして適切なイラストがふんだんに盛り込まれ、幼稚園教員と本学の DP との接点がとても分かりやすく説明されている（資料２－１―１）。

そして進学説明会も丁寧に行い、高校内説明会やオープンキャンパスにおいても入学者の質の確保のために、DP を明確に示してきた（資料２－１－２）。入試においては教職員によって評価基準を厳格に設け、本学への入学意欲が高く、教職に担うにふさわしい学生が入学するように努めてきた。

〔優れた取組〕

合格者に対しては入学前教育を実施し、保護者の参加も促すことで、本学と学生と保護者との間での信頼関係の構築を心がけた。こうして 2 年間という制約の中で、本学は家庭と一体となって、意識の高い幼稚園教員を養成するように努めてきた。この入学前教育（資料２－１－３）では、保護者に丁寧に資格取得の道のり、科目の特徴などを説明し、本学の教育の理解を深める一助にしている。また、入学前教育では、高大接続をスムーズにしつつ、学生が意欲的に教員を目指せる意識づけとして、ピアノレッスンを個別に行う等、きめ細やかな支援を行っている。

そして、入学後の教職課程の履修については、新入生に対してはガイダンスにおいて詳細な説明会を開催している。さらに、春の「フレッシュマン・キャンプ in キャンパス」においても、資格免許に関わる科目について教員が学生に付き添いながら説明し、理解できるように細やかに対応している。また、「保育・教職実践演習」において、「履修カルテ」を使用して、教職課程の各授業において、どこまで学びが深められたのかといった振り返りや評価ができるように促している。

〔改善の方向性・課題〕

入学前より入学前教育等を行うことで教員となる意識づけを行う等、本学では教職員が協同して取り組んできた。今後はさらに２年間の教育課程の体系化を行い、より質の高く芸術系短期大学の強みを活かした学生確保や教員育成を全学をあげて行っていくことが重要である。

〈根拠となる資料・データ等〉
資料２－１―１　デジタルパンフレット
https://www.d-pam.com/osaka-geitan/2210324/index.html?tm=1#target/page_no=1
資料２－１－２　学校説明会
https://osaka-geitan.jp/whatsnew/pdf/index/singakusetsumei.pdf
資料２－１－３　入学前教育案内（2023）
資料２－１－４　履修カルテ（再掲）

（２）基準項目２－２　教職へのキャリア支援
〔現状〕
就職活動の指導については、事務室就職担当が主体となって行なってきた。学生への情報の提供については、キャリタス UC 及びユニバーサル・パスポートを通じて周知し、ボランティアなどへの参加も促している。また、事務室での対面での相談時に学生の希望にすぐ対応ができるよう、都道府県、市区町村など細かく地域別に分けた求人票等の資料を準備し、常に最新の情報が提供されている。なお、本学では短期大学という特徴から、早い段階から学生に対して教員という道への意識形成を支援している。事務室就職担当は「就職支援プログラム」としてガイダンスなどを開催し、例えば 1 年生に対しては、卒業生を招聘して就職の報告会を開き、教員として働く意義や責任について学生がリアルに学べる機会を設けている。また、保育事業者を招致し、幼稚園教育の魅力について各園長より学べるように促している（資料２－２―１）。そして、2 年生に対しては、大学内での「学内合同就職説明会」や「履歴書講座」等の就職講座を放課後に開催し、豊富な資料を基に具体的な就職活動を示しながら丁寧に幼稚園教員になる道のりをサポートしてきた（資料２－２－２）。
このほか、本学独自の科目「公務員採用試験サロン」「キャリア対策講座Ⅰ」において、教員採用試験対策を実施し、個別に丁寧な指導も行い、地域に根差すといった、教員の使命を意識するように努めてきた。

〔優れた取組〕
教職を担う学生の育成は、短期大学ならではのアットホームなあたたかな空間で適切に行われている。入学前、入学後、卒業までの間に十分に情報が提供され、また就職への支援を受ける組織が確立されている。

〔改善の方向性・課題〕
今後も引き続き教員の育成に力を注ぎ、幼稚園教諭、保育教諭とはどういうものなのかを学生が理解し、教員になることへの意欲が高まるように努めていきたい。また、1 年次より学生のキャリア・パスに対する動機づけを高める支援を行い、教員養成の道のり等をきめ細やかに指導していくことが大切であろう。

〈根拠となる資料・データ等〉

資料２－２－１　令和 5 年度 講座・ガイダンス一覧

資料２－２－２　『就職支援ブック』2023

基準領域３ 適切な教職課程カリキュラム

（1）基準項目３－１ 教職課程カリキュラムの編成・実施

〔現状〕

教職課程のカリキュラムについての説明や履修方法などについては、『学生便覧』において学生に周知するとともに、教職課程を担当する専任教員・非常勤教員に対しても、担当する上で必要とされる情報は随時提供している

今年度より、教員がシラバスもより具体的に作成することで、学生の学修の一助となるように努めている。評価に関しても、1 年次より GPA（Grade Point Average）を採用する等、可視化できるように取り組んでいる。

〔優れた取組〕

個々の教員による取り組みは以下のようなものがある。

１）ICT 機器を活用した授業

①「保育・教育者論」において、文部科学省発信の資料の検索方法を学び、情報を的確に獲得する技術を身につける。

②「保育・教職基礎演習」および「保育・教職実践演習」にて、教員と学生でスマホ・タブレットの描画アプリを用いて絵本を作成し、クラウド上で進捗業況を共有しながら作成することで情報活用能力を獲得する。

③「保育内容（健康）」および「保育内容（言葉）」において、教材製作などのカット絵を WEB 検索し、必要な情報を素早く獲得する能力を育成する。

２）アクティブ・ラーニングを生かした授業

①「保育・教育者論」において、ICT 活用の模擬授業をし、学生がサーバーの動画で授業趣旨を事前に学習したうえで企画準備して担当教員に実演し、振り返ることで ICT の知識と技術を獲得する。

②「教育実習指導」において、ホワイトボード・ラーニングによって振り返ることで、課題発見や課題解決能力を育成する。

③「保育・教育課程論」や「保育・教職実践演習」にて、情報フォームによる即時性のある ICT の活用や情報提供を行うことで、協同的に学びの共有し、個々の学びを深める。

〔改善の方向性・課題〕

今後は、超スマート社会を見据えた ICT を教育に活用できる教員育成を行っていくことが重要である。そのためにも、個々の授業の中で教員も ICT を意識し、活用する授業を行っていく必要があるだろう。また、アクティブ・ラーニングを生かした授業もグループワーク等を行いながら、主体的な学びを支援していくことが大切である。

（２）基準項目　３－２　実践的指導力育成と地域との連携

〔現状〕

本学では本学附属幼稚園副園長を准教授として採用する他、幼稚園での園長経験等を有する優れた教員や現在も教育現場に携わる教員を特任教授、非常勤講師として積極的に採用し、実践事例を紹介しながら、学生たちに知識や技能が身につくように促してきた。また、学内では様々な体験活動を用意し、最新の子どもの状況を直に知ることができるような機会も設けており、実践に強い大学として位置づいている。具体的な取り組みは以下のようなものがある。

１）学内イベント「あんよがじょうず」

学生が企画運営し、高校生に対し、保育技術の披露を行う。教員はサポートに徹し、音響照明、材料（廃材）調達、製作技術についてアドバイスをしながら学生の自主性を育てている。こうして地域の子どもの様子を学生が知ることができている（資料３－２－１）。

２）学内イベント「ウィンターフェスティバル」

学生が日々の授業である「音楽」の成果を披露する場となっている。運営・進行等も教員のサポートを受けつつ、学生たちが行い自主性や協同性を育てている。学生が音楽に関する技能を披露する機会を設けることで、自らの技能を研鑽することができている。（資料３－２－２）

３）保育・教職実践演習（幼稚園）における子どもたちへの保育技能の披露

学生が劇やエプロンシアター等のプログラムを作り、保育技能を披露することで、実際の子どもと保護者の反応を知り、子どもの実態を知ることができている。（資料３－２－３）

４）地域連携事業「ぴよぴよげいたんひろば」

地域の未就園児親子を招待し、年６回、大学教員が絵本の紹介や親子製作、音楽講座等子育て支援を行った（資料３－２－4）

５）大学と教育委員会との組織的な連携体制

大阪市立学校園における学校支援ボランティアを推進し、大阪市立幼稚園における教育実習希望学生の事前研修参加をすすめることで、行政と大学とで組織的に教員を育成することを促している。また、学内で「実習懇談会」を幼稚園等と実施することで地域に根差した教員養成を協業する体制を整えている。（資料３－２－５）

〔優れた取組〕

本学では実践に強い学生を育成することに注力しており、学内・学外を問わず、教育に関するボランティアも行うように学生に促してきた。その結果、「あんよがじょうず」にみられるように、みんなで協働して子どものために尽くすという奉仕の精神が身につき、さらには教員の資質として必要なリーダーシップ、積極性や責任感なども自然と習得しており、就職先の園からも高い評価を頂いている。また、本学を卒業して教育現場に就職し、キャリア

を積んだ後に副手として本学の職員になるケースも多く、本学の教育の特色を守りながら、時代の要請に合う教員の育成に貢献している。

〔改善の方向性・課題〕

体験的学びを大切にしてきた本学だからこそ、その学びを発展させることが期待される。それぞれの体験的な学習がどのように関連し、系統立てられるのかを整理することで、一人ひとりの学生の学びが深くなっていくだろう。また、体験的学びの後の教育効果を十分に検証することで、さらなる改良が見込まれる。

本学は短期大学であるため、ボランティアやインターンシップ等の活動を行う機会を設けることが時間的に難しい面はあるが、教育委員会や各幼稚園等と連携を図り、長期休み中に行えるように学生に周知を行い、学外での学びを促していくことも大切であろう。

今後地域との連携を見据えた「ぴよぴよひろば」等の体系的かつ計画的な実施を行うことで、教員養成および学術機関として地域への貢献にも努めていきたい。

〈根拠となる資料・データ等〉

資料３－２－１　2023 オープンキャンパスチラシ「あんよがじょうず」（再掲）
資料３－２－２　「ウィンターフェスティバル」プログラム
資料３－２－３　「保育・教職実践演習（幼稚園）」案内チラシ
資料３－２－４「ぴよぴよげいたんひろば」案内チラシ
資料３－２－５　実習懇談会案内

Ⅲ　総合評価　（全体を通じた自己評価）

本学は長い歴史と伝統の下で幼児教育に努めており、現在は芸術系短期大学としての個性を生かしながら、教育の環境改善に努め、Society5.0 を意識した教員養成を発展させる素地を備えている。そして、短期大学という規模を生かしながら、教職員は常に細かく情報共有ができ、教職課程の管理運営も組織的に実施されている。教職課程の科目は卒業に必要科目に算入され、教職課程を履修しやすいカリキュラムである。今後は DP ならびに CP を学生が知る機会をさらに増やし、例えばシラバス上で周知をしながら本学の個性を生かした教員の資質向上を目指すことが望まれる。また、文部科学省の各種の通知にあるように、ICT 教育はどの学校種においても重要とされ、本学もデジタル機器を使いこなす教員の養成を目指すために、環境をさらに向上し、時代を切り開ける大学であり続けることを模索していきたい。

またポスト・コロナを見据えた体験的で実践的な教員養成をめざすことも課題である。今後は、グループワークやアクティブ・ラーニングに根差した教育も積極的に取り入れつつ、カリキュラムに反映していくことも模索していく必要がある。そして、ESD（Education for Sustainable Development）への理解を深め、子どもたちに広く多様な学びが深められるように学生の実践的な知識・技能の修得に向け、授業アンケート等も参考にしながら、教員もさらなる教育の質の向上を図っていくことが大切である。また今回の教職課程自己点検・評価を踏まえて、教職員ともに情報共有をした上で、さらなる教育の質を担保できるように教職課程のさらなる改善に努めていくことが肝要であろう。

今後の自己点検・評価の進め方については、実施間隔等については引き続き検討することとする。また自己点検・評価のプロセスについても今後の課題としたい。また自己点検・評価の実施手順として、今回の自己点検・評価は、一般社団法人全国私立大学教職課程協会が作成した「教職課程自己点検評価基準」を参考に実施した。

Ⅳ 「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス

まず、本学では教職に関わる業務を行う組織として教務委員会が設置されているが、「教職課程自己点検・評価報告書」を作成するにあたっては、本学の教職を持つ学科が保育学科のみであるため事務局長及び課長・保育学科長・保育学科教員による自己点検評価チームを構築し、実施手順を話し合った。対象とする領域・項目は、教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み、学生の確保・育成・キャリア支援、適切な教職課程カリキュラムとする。この決定は、教職科目担当教員及び事務職員に伝達され、 具体的な点検の段階では法令由来事項の充足状況の確認を行い、その上で自己点検・評価チームにより作成の経緯を学科会議において説明し、情報共有・承認を得ることとした。自己点検・評価チームは第１次原案を作成し、学科教員へ周知し、その後、学科教員および職員の意見を総合し

た上で改訂をした。第２次原案の作成し、それをもとに学科会議で合議を行った。そして、第 2 次原案の改訂版を教務委員会・教授会において承認を得た。今後は、教職課程自己点検・評価報告書を基に、教職課程の改善・向上に向けたアクションプランを検討も図っていきたい。

Ⅴ　現況基礎データ一覧

令和５年５月１日現在

設置者 学校法人塚本学院	
大学・学部名 大阪芸術大学短期大学部	
学科やコースの名称（必要な場合） 保育学科	
１　卒業者数、教員免許状取得者数、教員就職者数等	
①　前年度卒業者数	95 人
② ①のうち、就職者数 （企業、公務員等を含む）	76 人
③ ①のうち、教員免許取得者の実数 （複数免許者取得者も１と数える）	91 人
④ ②のうち、教職に就いた者の数 （正規採用＋臨時的任用の合計数）	31 人
④のうち、正規採用者数	24 人
④のうち、臨時的任用者数	7 人

２　教員組織

	教授	准教授	講師	助教	その他 （非常勤講師）
教員数	6 人	3 人	2 人	人	26 人

相談員・支援員など専門職員数 1 人